



2012年12月19放送

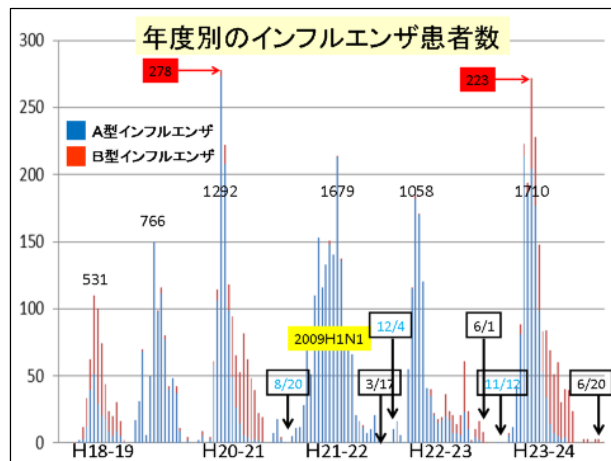
「流行期のインフルエンザ治療－実地医家の役割と診療の工夫」

安田内科小児科医院 院長
安田 敏男

私は、東京から東名高速で86km、車で約1時間ほどの距離にある静岡県御殿場市で開業している安田内科小児科医院の院長の安田敏男です。今日は、私たち開業医がインフルエンザの患者さんをどのようにして診察しているかをお話ししたいと思います。

待合室での感染予防

御殿場市は、隣町の小山町とあわせて約10万人の診療圏にあります。私は、昨年の11月12日から今年の6月20日までの間1710名のインフルエンザの患者を今シーズン診察致しました。この患者数は、2009H1N1の時の患者数より多く、この2年間の特徴として6月になってインフルエンザの患者さんを診察しました。最近の6年間で1週間当たりの新患のインフルエンザ患者数は、最高で278名。今シーズンは223名でした。このように流行期は1週間当たり新患と再診のインフルエンザの患者さんだけで500名近くを診察することになります。



多数のインフルエンザの患者さんが待合室に集まるわけですから、感染リスクの高い待合室での感染予防が最も重要と考えています。患者さんもスタッフも、手洗いの励行、マスク着用はもちろん重要ですが、一番大事なのは、飛沫感染を防ぐための待合室の椅子の横並びの設置です。

多くの待合室で見られる縦方向の椅子の設置では、後ろに座っている人から前の席に座っている人への飛沫感染につながります。実際学校では、後ろの席の人への感染は殆どなく、前列方向への感染を多く認めます。また患者さんからの要望が多い、空気清浄器や空気清浄除菌 脱臭装置を当院では待合室に設置しています。

**当院でのインフルエンザ感染予防対策
～待合室における工夫～**



感染リスクが高い待合室での感染予防対策が最も重要

- ①患者さんもスタッフも、手洗い励行・マスク着用
- ②飛沫感染を防ぐため、椅子は横並びに設置する
- ③紫外線殺菌ランプ内臓空気清浄除菌脱臭装置(A)と多数の壁掛け空気清浄機(B)

ソフト面の工夫

次に多くの患者さんに対する受付の工夫として

① として高熱の患者さんを優先的に診察する事です。

院内に高熱や具合の悪い方は、お申し出くださいの張り紙だけではなく、受付の事務員が、受付の事務員が、患者さんの発熱の有無や家族のインフルエンザ患者の有無、学校でのインフルエンザ流行期には、どこの学校に通学しているかを聞く事が大事です。高熱で呼吸感染を疑う患者さんがいれば受付事務員が、速やかに看護婦さんや診察室の事務員に連絡するようにしています。

工夫の②として診察の待ち時間にインフルエンザの迅速検査を行う事です。

もし医師の診察までに待ち時間がある場合は、看護婦さんがインフルエンザの検査の説明と検査の了解を求めてから医師の了解の上で診察前に検査を行います。患者さんの待ち時間を利用することで患者さんの待合室での滞在時間を短くする事ができ、また他の患者さんとの接触を防ぐ事にもなります。その検査終了後診察室での診察になります。

受付の工夫③として発熱患者さんに、自宅での体温の変化を自分で測定し記入してもらい、その温度表を再診時受付に出してもらおう事です。

この体温グラフをみる事により、受付でインフルエンザの再診である事が速やかに分かります。また解熱して症状が軽快した患者さんには、会社や学校に提出する出席許可証を準備します。万が一 解熱せず、症状が改善していない患者さんの時は、最優先で診察する様に診察室に連絡します。

こうした受付の工夫で 待ち時間を有効活用し、検査や再診の時間を短縮する事ができ、診察にゆとりがもてる様になります。

**当院でのインフルエンザ感染予防対策
～ソフト面での工夫～**



インフルエンザ患者さんが待合室に滞在する時間を短縮することで、他の患者さんとの接触を防ぐ

- 診察の待ち時間を利用して、高熱で全身状態が悪い患者さんには、診察前に検査の説明を行い、インフルエンザ検査キットで検査を実施。

検査終了後 診察室へ移動、そこで診断を行う。
処置室・点滴室で加療・出席停止連絡票の記入を行う。

- 発熱表を渡し、再診時に受付で重症化していないかチェック。重症化の恐れがあれば、診察を優先。

また、再診時症状消失時も再診を優先し、会社や学校の出席許可連絡票速やかに記入を行う。

当院ではインフルエンザ流行期の勤務時間の工夫として通常より早い朝8時からの診療を開始したり、臨時に診療時間を長くしたりして患者さんの動向に合わせて臨機応変に対応する事が大事だと考えています。こういった対応とるためにもスタッフの協力が必要です。当院では夏の患者さんの少ない時期に事務員看護婦さんに2週間のまとまった夏季休暇をとってもらい、インフルエンザ流行期に備えるようにしています。

情報提供の工夫

患者さんへのインフルエンザについての情報提供の工夫として

①として自院のHPで今年のインフルエンザの流行やインフルエンザワクチンの必要性についてお知らせする事です。特に、日本の夏の時期は南半球は冬なので夏の時期は南半球は冬なので南半球の今年の流行状況などをお知らせしたり、厚生労働省のサイトから現在のインフルエンザの流行状況などをお知らせしています。

②として当院では待合室に多数のモニターを設置してあり、power pointを使い動画で患者さんに、待ち時間の間に情報を提供しています。紙面でもいいと思いますが、動くものの方が、患者さんは関心を示してくれるし、理解度もあがります。

これらを使ってインフルエンザの病気の説明や検査のやり方、感冒との違いや、その日の市内の流行状況をお知らせしています。

御殿場市では、幼稚園・保育園・小学校・中学校の当日のインフルエンザによる欠席状況を当日の午後1時までF a xで知らせてくれるシステムがあります。この連絡により学校や幼稚園の流行状況を正確に把握でき、その日の診療に役立てるだけでなく、待合室に各幼稚園・学校ごとの欠席状況を毎日掲示し、患者さんやその家族に正確な情報提供を行っています。

こうしたことを行う事により 患者さんの待ち時間をインフルエンザの情報提供の時間とするのがコツと考えます。

迅速検査を行った患者さんへの説明

患者さんのニーズは、インフルエンザの治療においても 病気に対して十分な説明を受け、しっかりとした治療を納得して受けられる事だと思います。当院では、インフルエンザの迅速検査を行った患者さん全員に、B4の用紙を配布し説明を行っています。(このPDFのおしまいに掲出)

患者さんへの情報提供の工夫

- 地域から世界まで、最新の流行状況入手する
- ホームページや紙面で事前に情報を発信する
- 待合室のモニター画面で最新情報を発信する
- 疾患を説明する冊子を作成し、診察時に渡す

適切な情報提供により、患者さんの理解度と治療効果が向上する

患者さんの待ち時間=情報提供の時間とするのがコツ

この用紙には、インフルエンザの迅速検査のやり方、その診断の感度は100%ではない事、検査の偽陽性の説明を行います。検査陰性の患者さんには、発熱後24時間以内に検査をして陰性であっても、症状が改善しないならもう一度検査を受ける事を必ず説明します。インフルエンザが確定した人には、症状の経過についてと家族等への感染予防についての説明が記載してあります。


患者さんにA型かB型の説明を行い、説明用紙に記載も行います。インフルエンザの治療には、内服薬・吸入薬・点滴薬がある事とその特徴について説明し、患者さんと相談し治療薬を選択します。最後に次回外来受診時に自宅で記載した体温表を受付に出してくれば優先的に診察する事を伝える事も大事です。

インフルエンザの治療薬


インフルエンザの治療薬には①として服用方法の患者さんの理解は容易で、幼児から高齢者まで使える経口薬。②として局所薬なので、的確に分布すれば少ない副作用で効果が得られる吸入薬③として基本的に15分で投薬が終了し、解熱時間が一番早い点滴薬—の三つがありますが、私は、乳児・幼児には、経口薬のドライシロップを、4歳以上からは、解熱時間の一番早い点滴薬をお勧めしています。10歳未満の患者さんは、吸入がうまくできない事が多く、吸入の仕方を説明するより点滴をするためベットになるほうが、高熱の患者さんには楽な印象です。点滴を行う15分間で会計と処方箋の用意をする事ができ、点滴終了後速やかに帰宅することができます。点滴薬は、とにかく解熱時間がはやく、平均して小児で約20時間成人で1日半くらいで平熱に戻ります。患者さんの治療に期待する事は、症状が早く消失し副作用が無いことです。この要望に一番こたえられるインフルエンザの治療薬は、点滴薬と考えます。

治療の工夫(抗インフルエンザウイルス薬の選択)


経口薬:服用方法の患者さんの理解は容易で、幼児から高齢者まで使える。



吸入薬:局所薬なので、的確に分布すれば少ない副作用で効果が得られる。



点滴薬:基本的に15分で投薬が終了し、治療中に説明ができる。



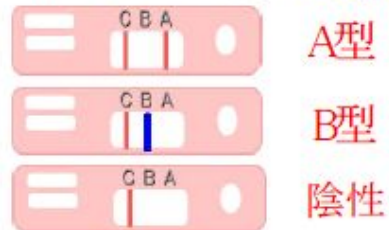
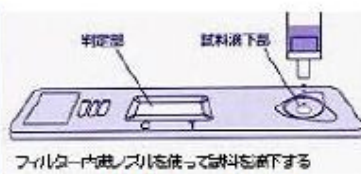
患者さんがインフルエンザの治療に点滴薬がある事を知らない!

インフルエンザの検査を受けた方へ(安田医院)

インフルエンザの診断検査方法(迅速診断キット)

感染直後にインフルエンザウイルスを検出するための迅速検査が普及しています。鼻粘膜や咽頭粘膜を綿棒で擦過し、綿棒についたウイルスの有無を調べます。約3～8分で結果がでます。迅速診断キットではある程度のウイルス量が必要なので、軽く粘膜をこすった程度ではウイルス量が少なく、検査が陰性になりやすいのです。しっかりと綿棒をこすりつけるので、痛みを伴うことがあります。感染の初期はまだウイルス量が少なく、インフルエンザであるにもかかわらず、検査結果が陰性になる可能性がかなりあります。迅速検査は絶対的な診断法ではないことに注意下さい。

①診断の感度は100%ではありません。



インフルエンザウイルスの増殖は、発病後2～3日で最高に達し、その後急速に減少し、5～7日で消失します。迅速診断キットで陽性になるには、インフルエンザウイルス量がある程度必要です。ウイルス量の少ない発病の初期は陰性になりやすくなります。ただ陽性となった場合はほぼ100%インフルエンザと診断できます。

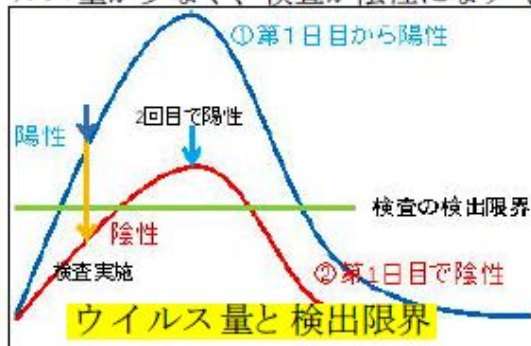
②患者の年齢が高いと検出率が低くなります。大人はある程度免疫があり、インフルエンザウイルスの増殖をある程度抑えることができるために、大人のウイルス排出量は小児のよりもずっと少ないことが知られています。

③発症からの期間が短いとウイルス量が少なく、検出率が下がります。発症後12時間以内は、ウイルス検出率はかなり悪く、24時間以降は検出率がよい。

④インフルエンザBの検出感度はインフルエンザAより劣ります。

3回目の検査で陽性になる事がよくあります。

⑤鼻腔ぬぐい液の取り方が重要です。検査には、ある程度のウイルス量が必要なので、軽く粘膜をこすった程度ではウイルス量が少なく、検査が陰性になりやすくなります。



検査の擬陽性について検査で陰性となった場合であってもインフルエンザに感染している場合(偽陰性)もあります。もし、発熱後24時間以内に検査をして陰性であっても、症状が改善しないようならもう一度検査することをお勧めします(発病後1日以内は感度が低い)。実際に1回目の検査で陰性であった人が2回目では陽性になることはよくあります。

●インフルエンザの症状？

38度以上の急な高熱と悪寒、頭痛、上気道炎症状、全身倦怠感等の強い全身症状が出現します。

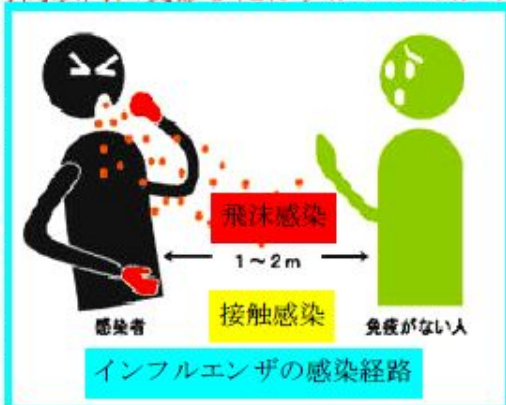
●成人では38度未満でもインフルエンザを疑います？ 成人では、インフルエンザは高熱とは限りません。発熱以外は典型的なインフルエンザの症状と同じというインフルエンザは、成人に多いという事が分かってきました。自分の周囲の流行状況や、自分の近くにインフルエンザ患者がいたかどうか、全身症状が強いかなどを十分に参考に1して来院してください。

<p>普通感冒(鼻風邪)の</p> <ul style="list-style-type: none">・症状は徐々に悪化・鼻水など鼻炎症状が・発熱は軽度で、全身は軽い・肺炎などの合併症はない	<p>普通感冒 < インフルエンザ</p>  <p>弱い 全身症状 強い</p>	<p>インフルエンザの特徴</p> <ul style="list-style-type: none">・高度発熱(38.5度以上)・筋肉痛・関節痛などの症状が強い・肺炎などの重症合併症が多い・通常12月末から4月始
---	--	---

●インフルエンザの症状の経過: 病気の始まりは、筋肉痛、関節痛、から咳、のどの痛み、無気力が顕著となります。38度以上の高熱が平均2~4日続きます。子供では半日から1日解熱したかにみえる2峰性の発熱を示す事が30~70%に認められます。解熱後もくしゃみや鼻汁が続きます。合併症がなくとも体調が元に戻るまでには、解熱後約1週間はかかります。また子供では、腹痛、嘔吐、下痢を伴うことも少なくありません。大人ではB型よりもA型のほうが一般的に症状は強くです。潜伏期は1日から5日(平均2~3日間)です。症状は約1週間で軽快することがほとんどですが、肺炎などを合併することも少なくありません。特に、高齢者では4人に一人は肺炎になるとも言われていますので、高齢者の肺炎合併には注意が必要です。

●なぜインフルエンザの症状が出て48時間以内に受診したほうがいいのか？

現在の抗インフルエンザ薬は、インフルエンザウイルスの増殖を抑える薬です。いったん体の中に入ったインフルエンザウイルスは猛烈な勢いで増え続けて、症状が出てから2~3日後(48~72時間後)に最も数が多くなります。ですから、ウイルスの量が最大になる前、つまり症状が出てから48時間以内に抗インフルエンザ薬を使って増殖を抑えれば、病気の期間を短くし、症状の悪化を防ぐことができます。ウイルスの数が少ないほど効果が大きくなりますから、早めの治療ほど効果的です。



●インフルエンザと診断された方へ あなたはインフルエンザ A型・B型です。抗インフルエンザの点滴(ラピアクタ)・タミフル・リレンザを処方します。次回来院時体温の変化を記載したグラフを当院受付にお出し下さい。早めにお呼びします。自宅安静期間は、5日以上必要です。